4. 新しいSCC抗原測定用キット"SCC RIA BEAD"の基礎的，臨床的検討

武田　良一　小宮　妙子　一矢　有一
綾部　善治　桑原　康雄　増田　康治
（九州大・放）

SCC RIA BEADはビーズ固相法を用いたone stepサンドイッチ法による新しいSCC抗原測定用キットであり，固相化抗体および標識抗体にモノクローナル抗体を使用している．従来より用いられているSCC RIA KITとの対比検討により，本キットの評価を行った．その結果，基礎的検討では，ほぼ満足できる結果であった．また，健常成人76名の平均値は0.69 ng/ml，標準偏差は0.47であり，1.63 ng/ml以下を正常域とした．臨床例における検討では，従来法と比較すると，r=0.987と良い相関を示したが，正常範囲である低値域では本キットの方がより低い値を，高値域ではより高い値を示した．本キットは，操作が簡便で測定時間も短くてすむ点でも優れており，十分に臨床使用できるものと考えられた．

5. "Owl Eye" sign, "Fish Eye" signの^{123}Iおよび^{201}Tlシンチグラムの比較検討

棚橋　信介　一矢　有一　桑原　康雄
綾部　善治　桂木　誠　増田　康治
（九州大・放）

"Owl Eye" signとは，^{123}I-シンチグラムにおいて，functional noduleの中にcold areaが存在する像として，1970年にAshkerらによって報告され，また，"Fish Eye" signは，"Owl Eye" signとは逆に，functional areaを囲むようにcold areaが存在する像を呈するものとして，1985年にMercedesらによって報告されたものである．

今回，"Owl Eye" sign 4例，"Fish Eye" sign 5例を経験したので，^{201}Tl-シンチグラムとの関係を比較検討し，5型に分類した．

手術を受けた5例はいずれも良性の結節性甲状腺腫であり，cold areaに相当する部位には変性壊死による嚢胞形成がみられ，AshkerやMercedesらの報告と一致した．

6. 胆道閉鎖症術後の肝シンチグラフィ

桂木　誠　（九州がんセ・放）
一矢　有一　桑原　康雄　綾部　善治
増田　康治　（九州大・放）
松尾　進　池田　恵一　（同・小児外）

胆道閉鎖症の術後患児には，肝硬変症や門脈圧亢進症が高率に合併していることが知られている．このため術後の経過観察では，胆汁の排泄状態とともに肝障害の把握が重要である．肝障害評価の目的で施行した肝シンチグラフィの検討を行った．対象は胆道閉鎖症術後29例(90検査)である．^{99m}Tc-phytateを用いた．シンチグラムは肝生検，食道静脈瘤の有無，ICG値などの結果とよく一致していた．また初回の肝シンチグラフィの結果は患児の予後をある程度反映すると考えられた．肝シンチグラフィは経過観察のうえで有用な検査と思われた．

7. 前立腺癌患者の骨シンチグラフィと血清ALP, TAP, PAP

今村　秋彦　星　博昭　陣之内正史
鮫島　仁彦　渡辺　克司　（宮崎医大・放）

確診を得た前立腺癌患者62例を対象として，骨転移診断における骨シンチグラフィ，血清ALP, TAP, PAPについて検討した．骨シンチグラフィは，^{99m}Tc-MDP 25 mCiを静注し3時間後に全身像を撮影した．ガンマカメラは，Maxi Camera 400T，LVOVで，コリメータは，LEDP, LEGP, LEAPを使用した．骨シンチでは，62例中49例に異常集積がみられ，このうち骨転移と診断したものは40例であった．骨シンチのsensitivityは100%，specificityは59%であった．血清ALP, TAP, PAPのsensitivityは50～73%，specificityは77～96%であった．また，骨転移が多くなるにつれ，ALP, TAP, PAPは高値を示す傾向がみられた．

Presented by Medical*Online